

仙 台 稲 作 情 報 2024（総括号）

宮城県仙台農業改良普及センター TEL：022-275-8410 FAX：022-275-0296

HP：https://www.pref.miyagi.jp/site/sdnk/ E-mail：sdnkt@pref.miyagi.lg.jp

1 令和6年産水稻生育期間の気象経過と水稻生育への影響

（1）水稻生育期間の気象経過（仙台アメダス）

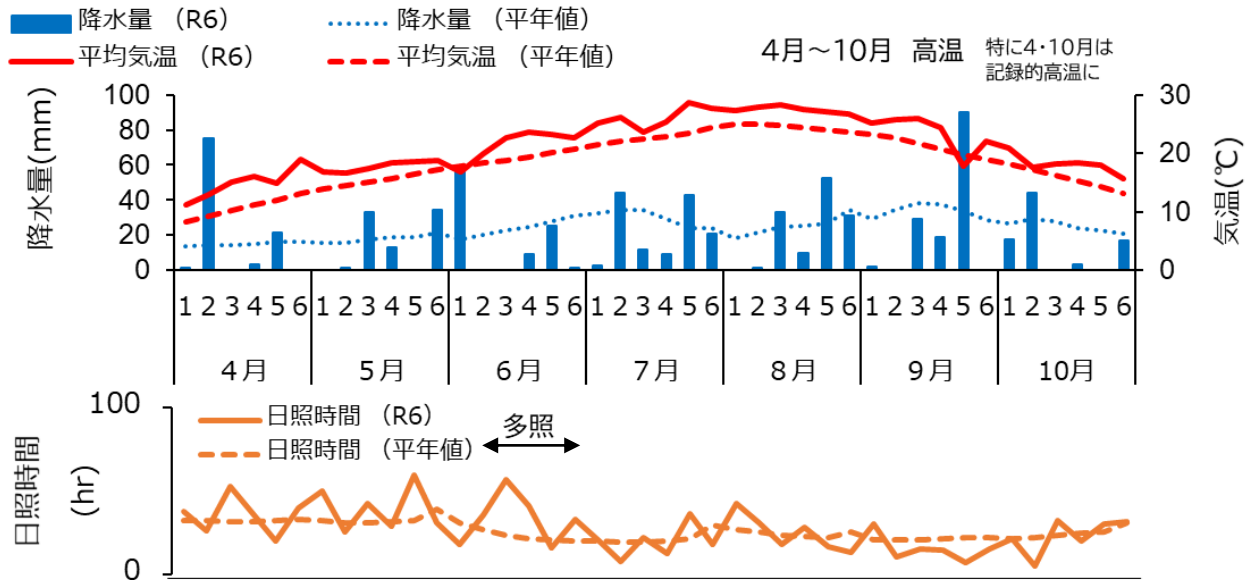


図1 気象経過

（2）水稻生育への影響

①育苗期

- ・4～5月の大きい寒暖の変動

→ 苗質及がやや不良、茎数がやや少ない
初期生育は移植時期によって差異あり

②出穂前

- ・6月2半旬～7月1半旬の高温多照少雨、7月6半旬の高温寡照

→ 茎数回復・穂数増加・粳数増加

→ 基肥窒素の消失が早い

→ 葉色の低下

③出穂後

- ・8月上中旬の高温多照、8月下旬の高温寡照傾向、9月の高温と断続的な降雨

→ 出穂やや早い

→ 初期登熟遅れ気味、登熟不良

→ 一部ほ場で刈遅れ、倒伏

2 令和6年産水稻の作柄・品質

（1）作柄（東北農政局 令和6年12月10日公表）

- ・宮城県の10a当たり収量は583kg、作況指数は107の「良」となっています。
- ・当普及センター管内を含む「中部」の10a当たり収量は562kg、作況指数は105の「やや良」となっています。

※収量のふるい目は1.7mm、作況指数のふるい目は1.9mm。

(2) 品質 (東北農政局 令和6年11月29日公表)

- ・宮城県の令和6年10月31日現在の水稻うるち玄米の1等米比率は89.8%となり、前年(最終)の83.9%を上回っています。
- ・2等以下に格付けされた主な理由は、「形質」66.3%、「着色粒」28.8%、「被害粒」3.7%でした。

※「形質」とは、皮部の厚薄、充実度、質の硬軟、粒ぞろい、粒形、光沢並びに肌ずれ、心白及び腹白の程度による。

3 管内の生育調査ほの生育状況等

(1) 生育ステージ

表1 仙台管内及び県全体における田植・出穂・刈取状況

	仙台管内			県全体		
	田植	出穂	刈取	田植	出穂	刈取
始期 5%	5/3 (平年並)	7/22 (6日早い)	9/14 (4日早い)	5/3 (1日早い)	7/24 (4日早い)	9/12 (4日早い)
盛期 50%	5/11 (1日遅い)	7/29 (3日早い)	9/28 (1日早い)	5/12 (1日遅い)	7/29 (3日早い)	9/27 (3日早い)
終期 95%	5/23 (平年並)	8/4 (3日早い)	10/14 (1日遅い)	5/23 (1日遅い)	8/5 (4日早い)	10/12 (2日早い)

※平年は仙台管内及び県全体の直近5か年の平均値。

仙台管内の田植盛期は、平年より1日遅かったですが、6月以降の高温の影響で、出穂期は3日、刈取盛期は1日早くなりました。県全体の生育ステージも概ね同様の推移でした。一方で、9月の断続的な降雨の影響で刈取り終期は平年より1日遅くなり、一部ほ場では刈遅れになったと推測されます。

表2 仙台普及センター管内生育調査ほにおける生育ステージ

品種	ほ場 (地帯区分)	移植日 (平年差)	幼穂形成期 (平年差)	減数分裂期 (平年差)	出穂期 (平年差)	成熟期 (平年差)
ひとめぼれ	仙台市宮城野区 (仙台湾沿岸)	5/16 (2日遅い)	7/12 (5日遅い)	7/22 (5日遅い)	8/2 (平年並)	9/7 (10日早い)
	大郷町 (北部平坦)	5/7 (7日早い)	7/10 (3日遅い)	7/21 (2日遅い)	7/31 (2日早い)	9/10 (6日早い)
	仙台市泉区 (西部丘陵)	5/15 (4日遅い)	7/6 (3日遅い)	7/16 (3日遅い)	7/28 (4日遅い)	9/5 (4日早い)
ササニシキ	仙台市若林区 (仙台湾沿岸)	5/17 (6日遅い)	7/8 (3日遅い)	7/17 (3日遅い)	7/29 (平年並)	9/7 (3日早い)

※平年差は直近3か年の平均値から算出。

出穂期以降の高温の影響で、いずれの地点も成熟期は平年より早く、登熟期間が短くなったと推測されます。特にひとめぼれでは成熟期が平年より5日程度早くなりました。

表3 県全体生育調査ほの地帯区分別生育ステージ（ひとめぼれ・ササニシキ 23 地点）

品 種	ほ場 (地帯区分)	移植日 (平年差)	幼穂形成期 (平年差)	減数分裂期 (平年差)	出穂期 (平年差)	成熟期 (平年差)
ひとめぼれ・ササニシキ	北部平坦	5/11 (1日早い)	7/7 (2日早い)	7/18 (2日遅い)	7/30 (4日早い)	9/5 (8日早い)
	南部平坦	5/12 (3日早い)	6/30 (4日早い)	7/13 (3日早い)	7/22 (7日早い)	8/28 (11日早い)
	仙台湾沿岸	5/13 (2日早い)	7/6 (5日早い)	7/17 (5日早い)	7/29 (5日早い)	9/5 (8日早い)
	西部丘陵	5/15 (6日遅い)	7/7 (平年並)	7/17 (1日早い)	7/30 (3日早い)	9/6 (7日早い)

※平年値は過去5か年の平均値から算出

県全体では、4月以降の高温の影響を受けて、生育ステージを通して平年より早く推移する傾向がありました。

(2) 生育状況

- 草丈・稈長 生育期間中の高温で、期間を通して概ね平年より大きい値で推移しました。
- 茎数・穂数 ひとめぼれでは、7月1日調査で平年より茎数が多くなりましたが、以降出穂期頃まで平年を下回って推移しました。
- 葉色 ひとめぼれでは、3～4月の降水量が多く土壌からの窒素供給量が少なかったことや、高温により基肥窒素の消失が平年より早かったことから、葉色は平年よりやや低く推移し、出穂期前後の生育目安より低くなりました。

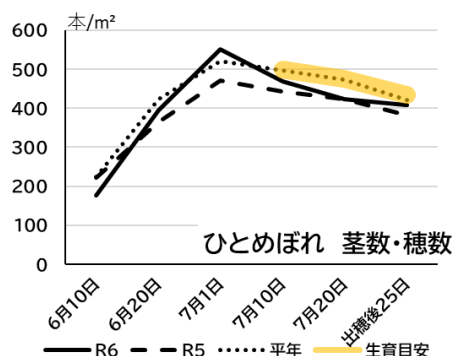


図2 茎数・穂数の推移（ひとめぼれ）

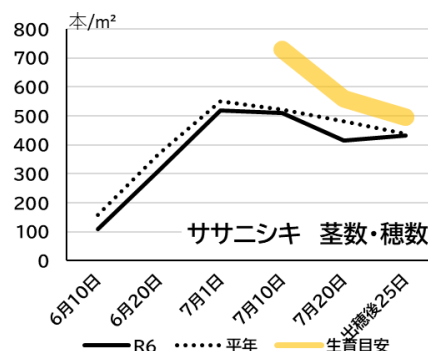


図3 茎数・穂数の推移（ササニシキ）

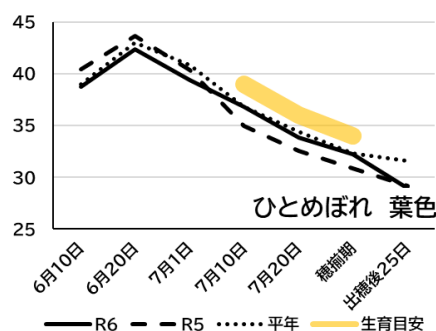


図4 葉色の推移（ひとめぼれ）

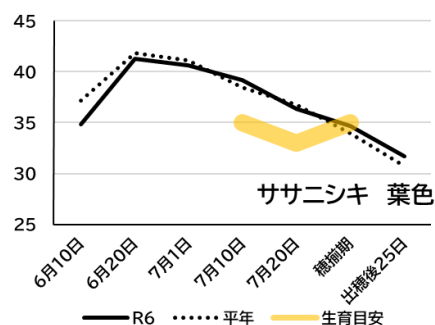


図5 葉色の推移（ササニシキ）

(3) 収量構成要素

- 籾数** ひとめぼれでは穂数は平年並、一穂籾数は平年よりやや多かったため、㎡当たり籾数は平年比 105%となり、収量構成要素目安の範囲内となりました（適正籾数：280～300 百粒/㎡）。ササニシキでは、穂数と籾数ともに平年より多く、籾数は目安と比べて過剰となりました（適正籾数：280～300 百粒/㎡）。
- 登熟歩合** ひとめぼれでは、1 ほ場で平年より高い登熟歩合だったものの、平年より低いほ場もあり、ほぼ平年並となりました。ササニシキでは、籾数が過剰であったこともあり、平年より低い値となりました。
- 玄米千粒重** いずれの品種も平年並の数値で、粒が充実していました。
- 精玄米重** ひとめぼれでは、玄米千粒重、籾数が平年並で、精玄米重は平年比 102%となりました。ササニシキでは、登熟歩合が平年より低かったものの、籾数が多く精玄米重は平年比 109%となりました。

表 4 収量及び収量構成要素（仙台普及センター管内、ふるい目 1.9mm）

品種	ほ場 (地帯区分)	栽植密度 (株/㎡)	区分	精玄米重 (kg/10a)	穂数 (本/㎡)	一穂籾数 (粒)	籾数 (百粒/㎡)	登熟歩合 (%)	玄米千粒重 (g)
ひとめぼれ	仙台市宮城野区 (仙台湾沿岸)	14.1	本年	473	345	83	288	74.8	22.0
			平年比・差	93%	100%	110%	111%	88%	95%
	大郷町 (北部平坦)	16.4	本年	614	443	65	289	91.0	23.4
			平年比・差	110%	100%	98%	98%	110%	101%
	仙台市泉区 (西部丘陵)	17.0	本年	540	446	66	293	80.4	22.9
			平年比・差	101%	96%	110%	106%	95%	101%
ササニシキ	管内平均	-	本年	542	411	71	290	82.1	22.8
			平年比・差	102%	99%	106%	105%	98%	99%
ササニシキ	仙台市若林区 (仙台湾沿岸)	13.7	本年	583	454	88	401	66.5	21.8
			平年比・差	109%	109%	131%	145%	79%	95%

※平年比・差は直近3か年の平均値から算出。

(4) 玄米品質

整粒歩合は、ひとめぼれが 66.0%、ササニシキが 58.8%と平年並の値でした。出穂後 20 日間の平均気温は高かったものの、白未熟粒の発生は少なくなりました。出穂前の寡照傾向により初期登熟が遅れたため、高温の影響が小さかったと考えられます。また、青未熟粒の発生がやや多くなりました。籾数が多かったことに加え、出穂前後の気温は高かったにも係わらず日照時間が少なく推移したため、稲体が消耗したと考えられます。

表 5 玄米品質（県内水稻生育調査ほ、古川農試作況試験ほ）

品種	地点数	区分	整粒 (%)	胴割粒 (%)	白未熟粒 (%)	青未熟粒 (%)	その他 未熟粒 (%)	着色粒 (%)	タンパク質 含有率 (%)
ひとめぼれ	18	本年	66.0	1.2	5.8	2.3	24.1	0.1	6.1
		平年差	99.5%	40.4%	71.2%	121.2%	133.8%	29.5%	99.5%
ササニシキ	6	本年	58.8	2.1	10.7	2.6	24.0	0.0	6.8
		平年差	98.4%	47.6%	72.7%	117.8%	168.6%	3.1%	98.4%
つや姫	8	本年	64.4	1.3	3.6	2.4	27.9	0.1	6.3
		平年差	100.1%	38.7%	94.6%	42.3%	135.0%	6.5%	100.1%

4 「金のいぶき」展示ほの調査結果

(1) 生育ステージ

展示ほの移植時期は 5/7（移植時期目安 5 月上旬～中旬）でしたが、6 月以降の高温の影響で生育ステージが早くなり、出穂期は目安より早い 8/1 となりました（出穂期目安 8 月 10 日頃）。古川農業試験場の作況調査ほでも、出穂期は目安より早くなりました。

表 6 生育ステージ

金のいぶき	ほ場 (地帯区分)	移植日 (前年差)	幼穂形成期 (前年差)	減数分裂期 (前年差)	出穂期 (前年差)	成熟期 (前年差)
	仙台市若林区 (仙台湾沿岸)	5/7 (3日早い)	7/8 (6日早い)	7/16 (6日早い)	8/1 (1日早い)	9/9 (9日早い)
	古川農試作況ほ	5/10 (前年並)	7/11 (前年並)	7/22 (1日遅い)	8/4 (前年並)	9/17 (2日早い)

(2) 生育の状況（普及展示ほ）

- 草丈・稈長 概ね順調に生育しました。
- 茎数・穂数 6 月以降の高温の影響により、茎数は目安より低く推移しました。
- 葉色 時期によって変動はあったものの概ね目安どおりに推移しました。

(3) 収量構成要素

6 月以降の高温の影響もあり分けつが増えず、 m^2 当たり穂数が収量構成要素の目標値に比べて少なくなりました。一穂粒数及び玄米千粒重は概ね目標値となりましたが、登熟歩合が伸びず精玄米重は 409kg/10a となりました。

表 7 収量及び収量構成要素（ふるい目 1.9mm）

金のいぶき	ほ場 (地帯区分)	栽植密度 (株/m ²)	区分	精玄米重 (kg/10a)	穂数 (本/m ²)	一穂粒数 (粒)	粒数 (百粒/m)	登熟歩合 (%)	玄米千粒重 (g)
	仙台市若林区 (仙台湾沿岸)	18.7	本年	409	383	66	251	65	22.0
			前年比	95%	95%	86%	81%	103%	104%
	古川農試作況ほ	18.5	本年	528	489	74	360	65	23.0
			前年比	103%	105%	103%	107%	93%	104%
	収量構成要素の目標				510～540	460～510	60～68	300～330	70～75

(4) 玄米品質

昨年と同様に、出穂期以降の高温の影響と出穂が早いことによる刈遅れの影響で、砕米や穂発芽が多発し、品質の低下がみられました。

金のいぶきは、品種の特性として「巨大胚のため胚芽自体の水分が下がりにくい」、「胚芽と胚乳の接合部分の面積が大きいため降雨や露等による水分吸収が早くて多い」、「低アミロース性が水分吸収と保持を助長しやすい」といった特徴があり、成熟期以降の降雨により、籾水分が下がりにくく、穂発芽が増加しやすい傾向があります。

5 水稻直播普及展示ほ（乾田直播・ササニシキ）の調査結果

(1) 生育ステージ

播種日は前年より 12 日遅い 4 月 18 日でしたが、播種後は高温であったため出芽揃いは 5 月上旬となりました。以降も生育期間を通して高温で推移したことにより生育が進み、出穂期は 7 月 31 日で前年より 1 日遅く、成熟期は前年より早くなりました。

表 8 生育ステージ

品 種	ほ場 (地帯区分)	播種日 (前年差)	幼穂形成期 (前年差)	減数分裂期 (前年差)	出穂期 (前年差)	成熟期 (前年差)
サ サ ニ シ キ	仙台市若林区 (仙台湾沿岸)	4/18 *(12日遅い)	7/8 *(3日早い)	7/16 *(2日早い)	7/31 *(1日遅い)	9/5 *(8日早い)

* 今年が調査 3 年目であるため、平年値なし。

(2) 生育の状況

○草丈・稈長 概ね前年並の生育でした。

○茎数・穂数 出芽は順調で、 m^2 当たり苗立数は 144 本/ m^2 となり、目標の 100 本/ m^2 を上回りましたが、その後分けつの増加が緩慢で穂数は生育目安を下回りました。

○葉色 6 月以降の高温の影響で肥料の溶出が早かったと推測され、生育期間を通して生育目安を下回りました。

(3) 収量構成要素

穂数は 527 本/ m^2 と前年より少なく、 m^2 当たり粒数は 233 百粒と前年の 59%となりました。登熟歩合が高く精玄米重は 527kg/10a で前年より多くなりました。

表 9 収量・収量構成要素 (ふるい目 1.9mm)

品 種	ほ場 (地帯区分)	区分	精玄米重 (kg/10a)	穂数 (本/ m^2)	一穂粒数 (粒)	粒数 (百粒/ m^2)	登熟歩合 (%)	玄米千粒重 (g)
サ サ ニ シ キ	仙台市若林区 (仙台湾沿岸)	本年	527	364	64.1	233	90	21.7
		*前年比	84%	67%	87%	59%	125%	99%
		収量構成要素目安	550~650	420~460	78~83	320~350	75~80	22.7~23.1

* 今年が調査 3 年目であるため、平年値なし。

※収量構成要素の目安は、乾田直播栽培用の基準を記載。

(4) 玄米品質

整粒歩合は 38.6%と、前年より低い値でした。これは、出穂後の高温の影響で白未熟粒とその他未熟粒（充実不足など）が多くなったためと考えられます。移植栽培では白未熟粒等が多い傾向でした。

6 高温対策技術普及展示ほ

今年度、県では登熟期の高温による収量及び品質低下を軽減するため、水稻高温対策技術普及展示ほを設け、高温対策技術の実証及び普及を図ってきました。仙台農業改良普及センターでは、出穂期及び登熟期の高温回避を図るため、仙台湾沿岸地域の乾田直播栽培ほ場（品種：ひとめぼれ）に普及展示ほを設置し収量調査等を行いました。

(1) 乾田直播栽培の出穂期

乾田直播栽培は、移植栽培と比較して出穂期が遅くなるため登熟期間の高温回避、リスク分散に有効とされています。しかし、近年のような高温年では乾田直播栽培でも生育が早くなり、出穂期や成熟期は移植栽培と大きく変わらない結果となりました。

白未熟粒率は、移植栽培より乾田直播栽培の方が低くなりました。乾田直播栽培は移植栽

培と比較して1穂粒数が少なくなる傾向があり、品質に影響したと考えられます。

表 10 栽培様式別生育ステージ・収量調査結果

	展示ほ	対照ほ
栽培様式	直播栽培	移植栽培
地帯区分	仙台湾沿岸地域	仙台湾沿岸地域
品種	ひとめぼれ	ひとめぼれ
移植日 (直播は出芽日)	5/2	4/21
出穂期	8/3	8/2
成熟期	9/9	9/7
収量調査		
稈長 (cm)	79.7	85.0
穂数 (本/m ²)	442.6	345.5
1 穂粒数 (粒/本)	69.3	83.0
粒数 (百粒/m ²)	30,672	28,811
精玄米重 1.9≤ (kg/a)	51.3	47.3
千粒重 1.9≤ (g)	23.3	22.0
玄米品質	1 等米の下	2 等の中
白未熟粒率 (%)	8 (乳白 2.8、基部未熟 4.0、背腹白 1.2)	11 (乳白 4.2、基部未熟 5.3、背腹白 1.6)

7 今年発生が多かった主要病害虫

(病害虫防除所作成資料「水稻主要病害虫の発生状況」より一部抜粋)

病害虫	発生量	発生要因
紋枯病	やや多い	・ 6月下旬から発病が見られ、9月上旬には病害虫防除所実施の巡回調査で発生地点率が77.2%となった。 ・ 発病株率は平年よりやや多く推移し、一部ほ場では病斑が止葉葉鞘まで伸展した地点もあった。
斑点米 カメムシ類	(草地)やや多い (水田)やや多い 斑点米発生量 平年並	・ アカスジカスミカメの発生盛期は平年より早い傾向で推移した。 ・ 病害虫防除所実施の巡回調査では、斑点米カメムシ類の発生地点率が平年よりやや高く推移し、虫数も7月下旬まで平年より多い傾向にあった。 ・ 大型の斑点米カメムシ類「クモヘリカメムシ」が増加している。

8 令和7年産の作付けに向けて

高品質の良食味米の安定生産のため、気象変動に対応できる栽培管理の励行に努めましょう。

(1) 高温への対策

令和6年は昨年に引き続き期間を通して気温が高温となりました。今後も高温年が続くことが予想されるので、高温対策のポイントを押さえて品質への影響を低減しましょう。

○高温対策のポイント

イ 水管理

出穂後5～15日の最低気温23℃以上が連続する高温の場合、白未熟粒が多発し品質の著しい低下を招く危険性があります。対策として、気温よりも温度の低い用水を十分に掛流す「掛流しかんがい」が有効ですが、用水量が少なくても水温や地温等の上昇を抑止する方法として、以下の2つの方策があります（掛流しかんがいより効果は劣ります）。

(イ) 走り水により土壌をつねに湿潤状態に保つ「保水管理」

(ロ) 高温時の昼間はできるだけ深水管理とし、夜間は逆に落水管理とする「昼間深水・夜間落水管理」→午前9～10 時頃にかん水し、午後4時頃に落水する管理。

ロ 適期追肥

出穂期以降の高温は品質を低下させますが、一方で穂揃期の期待葉色値を維持していたほ場では白未熟粒の発生が少ない傾向があり、葉色低下の防止が品質維持に繋がることがわかっています。品質を維持するため生育に応じた適量の追肥を心がけましょう。

(2) 適正籾数及び穂揃期の適正葉色の確保

イ 適正籾数

- ・収量、品質の安定性を確保するため、 m^2 当たり籾数 30,000 粒前後を目標とします。
 - ・基肥窒素 $1\text{kg}/10\text{a}$ 増肥 $\Rightarrow$ 約 1,500 粒/ m^2 の籾数増加
 - ・幼穂形成期の追肥 $1\text{kg}/10\text{a} \Rightarrow 1,500\sim 2,000$ 粒/ m^2 の籾数増加
- ※ほ場及び水稻生育にあった施肥・追肥を実施しましょう。

効果が期待できます！

ロ 適正葉色

- ・近年、高温により肥料の溶出が早くなり、生育後半に肥料切れして葉色が淡くなっているほ場が散見されます。また、籾数過剰に加え穂揃期における葉色低下により、高温時の白未熟粒の発生や、くず米が増加する可能性が高くなります。
- ・反対に、適正籾数であっても穂揃期の葉色が濃すぎると玄米タンパク含有量が高まり、食味低下のリスクが大きくなります。

→生育に応じた適期（主に幼穂形成期・減数分裂期）・適量の追肥が重要です。

表 11 「ひとめぼれ」の適正籾数及び品質を維持するための生育目標値

	分けつ最盛期	最高分けつ期前	幼穂形成期	減数分裂期	穂揃期	出穂後 25 日
莖数・穂数 (本/ m^2)	310～360	460～520	470～530	450～500	-	410～460 (穂数)
葉緑素計値 (GM値)	41～44	40～42	38～40	35～37	33～35	33 以下

(3) 病虫害防除の徹底

○高温の影響で、一部病虫害が多発しやすくなっています。また稲の生育の早期化や病虫害の発生が早まる可能性があります。稲の生育を確認しながら、計画的に適期防除しましょう。

イ いもち病

- ・直接減収につながる穂いもちを防ぐために葉いもちの防除は重要です。
→箱施用剤や水面施用剤による予防防除を必ず行い、発生が認められた場合には直ちに補完防除を行いましょう。穂いもち防除は薬剤による予防が重要です。
- ・粒剤の散布適期は出穂期が基準になるので、稲作情報等により確認して散布しましょう。

□ 斑点米カメムシ類

- ・毎年、斑点米カメムシ類による着色粒が原因で落等しています。
→水田周辺の雑草地など発生源の草刈り、水田内や畦畔の雑草防除のほか、穂揃期とその7～10日後の2回を基本に薬剤防除を徹底しましょう。
- ・クモヘリカメムシの発生が増えています。発生が多いほ場は2回目の防除の7日後に3回目の防除を行うと斑点米被害を大きく低減させることができます。

ハ 紋枯病

- ・発病初期防除には箱施用剤が有効です。
- ・防除体系に基づき、穂ばらみ期の茎葉散布と組み合わせて防除を行いましょう。
- ・前年に多発した場合は、翌年も多発する可能性が高いので、確実に防除を行いましょう。
- ・高温多湿条件で発生が多くなるので、前年多発したほ場では栽植密度を下げ株間湿度の上昇を抑制しましょう。

(4) 雑草対策の徹底

イ ほ場の整備

- ・湛水時の田面露出、適期を逃した除草剤散布などは雑草の繁茂に繋がるため、丁寧な代掻き（荒代・本代の2回実施など）や畦畔補修、除草剤の適期散布を徹底しましょう！

□ 除草剤の適切な使用

- ・今年雑草が残ったほ場では、初期除草剤と初中期一発剤、初中期一発剤と中後期剤等を組合せた「体系除草」を行いましょう。
- ・水持ちの悪いほ場では、豆粒剤やフロアブルなどの水に溶けやすい剤型を用いると、田面水とともに有効成分が流亡するので、粒剤の使用を検討しましょう。

ハ 除草剤抵抗性雑草や難防除雑草への対策

- ・多くの草種でスルホニルウレア系除草剤（S U）の抵抗性個体群が確認されています。
→特定の除草剤成分の連用を避け、抵抗性個体にも有効な剤を使用しましょう。

(5) 土づくりの実施

イ 深耕

- ・深耕による根域拡大は、背白粒等が減少し整粒歩合を向上させます。（目安：15cm 程度）

□ 有機物や土づくり資材の施用

- ・肥料コスト上昇や気象変動に対応するため、土壌診断に基づく施肥や有機資源（堆肥、稲わら等）を適量施用し、適切な肥培管理を行いましょう。
- ・完熟堆肥の連用は、稲わらすき込み等より白未熟粒の発生抑制効果があります。特に転換田は有機物が消耗しやすく土壌の可給態窒素も減少するため、施用を検討してください。
- ・ケイ酸質肥料は、受光態勢の改善や光合成能力の向上、リン酸質肥料は、低温時の活着促進や分けつ促進の効果が期待できます。

表 12 土壌タイプと土づくり肥料及び堆肥の施用目安

土壌タイプ	土づくり肥料		堆 肥 (t/10a)
	ケイ酸質 (kg/10a)	リン酸質 (kg/10a)	
黒ボク土	120～160	60～120	1.0～1.5
灰色低地土	60～100	40～100	1.0～1.5
グライ土	80～100	40～100	1.0～1.2
黒泥・泥炭土	120～160	60～120	0.8～1.0

（６）環境にやさしい米作り

- ・「みやぎの環境にやさしい農産物認証・表示制度（県認証）」では、移植栽培及び湛水直播栽培の農薬及び化学肥料の節減基準として、農薬有効成分 8 成分以下、化学肥料由来の窒素成分 3.5 kg/10a 以下と定めています。
- ・令和 6 年度に新たに「乾田直播」の区分が追加され、県慣行栽培の基準及び節減基準が移植栽培等と別に設けられました。

表 13 乾田直播栽培の節減対象農薬及び化学肥料の使用基準（県慣行の 5 割以下）

節減対象農薬の延べ有効成分数		化学肥料の施用量（窒素成分量 kg/10a）	
節減基準	県慣行栽培	節減基準	県慣行栽培
10	20	6	12